

このうちの一人、ドゥーイ・パンダットは、13歳、ボルルール本校の6年生です。父親の職業がWMCの労働者とあります。WMC（オーストラリアの多国籍鉱業資本）による露天掘りの銅採掘にビラーン族の住民やCMBは、WMCがたとえ政府の許可を得ているにしても、環境を破壊し、先祖伝来の土地を奪うものとして反対してきましたが、生活のためにWMCに雇用されるビラーン族も多いときいています。彼女の父親もそうした一人でしょう。

カレッジ学生のドリは、教師希望の好青年です。父親はすでに死亡し、母親が農業と家政婦をして生活を支えています。助産婦志望のアルマとともに、寮では、ハイスクール生徒のお兄さん、お姉さん役を務めているようです。

（これまで対象に含めませんでした。カレッジ学生への支援は、今回の新会費規定では、月額900円、年額10,800円とさせていただきました。）

§ ビラーンの学校の教師給与に、新潟・国際協力ふれあい基金からの助成がきました §

助成の成果を確かめにくいということで、決定までに審議委員の間で多くの議論があったということですが、現地情報をこまめに送ってくれるCMBの日頃の真摯な対応も幸いして、活動開始1年余りと日が浅いにもかかわらず、HANDSの活動を認めていただき助成を受けることができました。ただし、まず1年間の実績を見てということで、3年間という助成希望はおあずけになりました。

このふれあい基金からは、この11月から1年間、CMBの4校、教師18名（平均給与約1万円）に対し、総額324,000円（平均一人月額、1,500円の増額）を給与補填分として、いただくことになりました。

公立小学校の3分の1という安い給与に加えて、不便な山の中の勤務も教師不足の原因で、ビラーンの子どもの就学率は10%程度にとどまっています。今年は助成金がいただけましたが、今後のことも考えて、トゥモロクやサムラングの先生達は、ブタを飼ったり、野菜を作ったりして自衛策を講じています。

HANDSによる奨学金、教師の副業、住民の教育費負担能力向上、どれも決定打にはなり得ないのが実状です。来年度も新潟の助成金を受けられるよう努力するつもりですが、楽観は出来ません。

もう一つの選択肢として、現地の高い預金金利（年8%~20%）の利用があります。幸い、会員の笠井さんのご協力をいただけましたので、この10月末から3年間CMBに1万ドルを貸し、金利分だけ教師給与補填に提供することにし、契約書を交換しました。

§ 環境保護と将来の現金収入源を目指した植林事業 §

会員の篠原さんが植林基金にと、定期的を送金してくださっています。地球温暖化防止のための二酸化炭素排出量規制が提案されていますが、一方で熱帯林の再生事業の推進も重要課題です。

主旨にご賛同の方は、植林基金と書いて、随時ご送金いただければ幸いです。ある程度基金が集まれば、補助金申請もできます。

サムラングのきれいにはげあがった山々は、奈美さんの「チョコレートヒルズみたい」の表現にあるように景観としては悪くありませんが、土壌浸食、洪水の原因にもなりますし、少しずつでも緑が増えることを願っています。

温暖化ガス削減に関して先日、新聞に「アジア7カ国の二酸化炭素排出量」がでていました。炭素換算で日本は一人当たり2.92トン、一方フィリピンは0.12トンでした。約24倍です。

先日の現地よりのファックスによると、「トゥモロクでは、9月から発電機を1台備えて、1日2時間だけ電気が使えるようにした」との報告がありました。小型水力発電とか、風力とか、化石燃料を使わない方法が理